様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　４月１５日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2012～2012
課題番号：２４８３００１９
研究課題名（和文）
コミュニティ活動量が幸福度に与える影響の解明
研究課題名（英文）
Study on relationship between happiness level and communicational activities
研究代表者
蘆澤　雄亮（ASHIZAWA YUSUKE）
千葉大学・大学院工学研究科・助教
研究者番号：90634585

研究成果の概要（和文）：
本研究では「ヒトの幸福度は何らかの集団に属し、活動を行った量に比例する」という仮説に基づき、予備調査として 20 代～60 代の男女 524 名、本調査として 20 代～60 代の男女 1,075 名に対し、幸福度に関する項目および家族、友人、職場等のコミュニティにおける活動時間についてウェブアンケート調査を行い、その相関性の分析を行った。その結果、コミュニティ活動の相関としては「家族との接触時間」に多少の相関性がみられたが、それ以外においてはさほど相関がみられず、仮説は否定された。しかしながら、「何らかのやりがいを持っているか？」の項目が幸福度との相関性が高いことが発見された。

研究成果の概要（英文）：
In this study, we conducted web research on the hypothesis that happiness level is proportional to the amount of community activities and questions regarding happiness level, total time of community activities with: family, workplace, friends, and so on: about 524 men and women from 20's to 60's as a preliminary survey, about 1,075 men and women from 20's to 60's as a main survey. As a result, we found relationship between happiness level and total time of activities with family, but other activities have not strong relationship with happiness level. However we found the question that "Do you have some kind of rewarding?" has strong relationship with happiness level.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１２年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
年度			
総　計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：デザイン
科研費の分科・細目：経済学、経済政策
キーワード：幸福度指標、コミュニティ活動量、主観的幸福度

１．研究開始当初の背景

現在、国の発達度合いを測る指標として国内総生産（GDP）が重要視されている。これは「所得の向上が人々の幸福を増進する物質的条件である」という前提に基づき、フロー（所得）の増加がすなわち国民の幸福度向上へ繋がるという見方により国民の幸福度合いを示す指標として重要視されている。しかしながら 1990 年代以降、特に先進諸国においては所得が増加したにも関わらず主観的幸福感が低いという「幸福のパラドックス」問題が提起されるようになり、GDP を超えた新たな指標としての「幸福度指標」が幸福の経済学として多くの国々で研究されるようになっている。

この時、GDP を補完するという目的として考えた場合、NNW や ISEW、GPI 等が最もその方向性に近しいと考えられるが、いずれにおいても補完項目が非常に多く計算方法も複雑なため、本格的な導入に至っていない。そのため、実際の運用を考えた場合、大きく寄与する項目を導出し計算方法をいかに簡略化するかという点も重要であると考えられる。

２．研究の目的

幸福度指標に関する論議および幸福の構造に関するデザイン研究の両者において幸福度向上に大きく寄与するものとして共通する項目に「関係性」がある。フランス・ドゥ・ヴァールは進化生物学および動物行動学的見地においてもコミュニティ活動における関係性および共感性が幸福度向上に寄与していると述べている。

本研究では特にこの点に着目し、様々なコミュニティ活動が幸福度向上にどのように寄与するかを導き出し、経済活動・非経済活動および寄与度、活動性質等に基づき幸福度指標を基準としたコミュニティ活動の分類・統合を行う。

３．研究の方法

本研究ではプロセスを大きく３つのフェーズに分け研究を行う。第１フェーズでは文献調査およびヒアリング調査を行い、「関係性」をベースとしたコミュニティ活動にどのような種類があるかについて調査を行う。

第２フェーズでは第１フェーズにより得られたコミュニティ活動の種類が幸福度に対してどのような影響を及ぼすかについて仮説を導き出し、予備アンケート調査を行う。このフェーズでは予備アンケート調査の結果をもとに、コミュニティ活動のカテゴライズ化および幸福度に対して影響度の高い項目の抽出を行い、幸福度指標の仮説を導き出す。

その後、第３フェーズでは第２フェーズで得られた項目と幸福度との相関性についてアンケート調査を行うことにより仮説検証を行う。

４．研究成果

第１フェーズとして本研究に関心のある学生、社会人等５名によるワーキンググループを作り内閣府が行っている幸福度指標に関する研究を中心に文献調査を行い、それら文献調査に基づき、幸福度に対して関連性が高いであろう項目に関してディスカッションを行い、仮説構築を行った。その結果、

(1) コミュニティにおける関係性が幸福度に大きく寄与するのではないか？
(2) 内閣府発表による「経済社会状況」「健康」についても何らかの関係性があるのではないか？
(3) 「夢」「希望」といった何らかの目標を持ち得るかどうかが幸福度に対して大きく寄与するのではないか？

という仮説を導き出した。また、アンケート調査に関してもある特定の状態を持ち得る人間のみを対象とすることにより生じるバイアスが結果に対して影響するのではないかという懸念も抽出された。

これに基づき、第２フェーズとして 20 代から 60 代の男女 524 名（各年代毎に約 100 名ずつ）を対象に予備アンケート調査をインターネットで行った。この予備調査では上述した仮説の検証として幸福度の他に

(1) <u>関係性に関する詳細項目</u>
「同居中の家族」「別居中の家族」「職場の同僚」「恋人もしくは配偶者」「友人」「ご近所」との関係性

(2) <u>内閣府発表の軸に関する項目</u>
「自身の健康状態」「家族の健康状態」「収入金額」「可処分所得金額」「収入に対する満足度」「生活困難度」

(3) <u>目標に関する項目</u>
「夢・希望の有無およびその内容」「何かやりたいことの有無およびその内容」

(4) <u>「幸福」という言葉のバイアス調査項目</u>
「不幸具合に関する項目」「幸福になるために重要だと思われる要素」「不幸にならないために重要だと思われる」

について調査を行った。この結果、幸福度に関しては内閣府調査（国民生活選好度調査）と比較し、さほどの違いが見られないことが

分かり、ウェブアンケート調査によるバイアスの影響はさほど考慮しなくてもよいことが分かった。

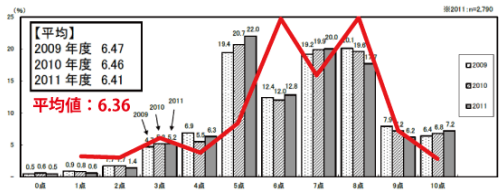

図１　国民生活選好度調査との比較

また、ウェブアンケート調査対象者の特徴として主婦が多い（129 サンプル／24.6%）ことが挙げられたが、これについても主婦とそれ以外の職業について t 検定を行った結果、有意な差は無いことが分かった。

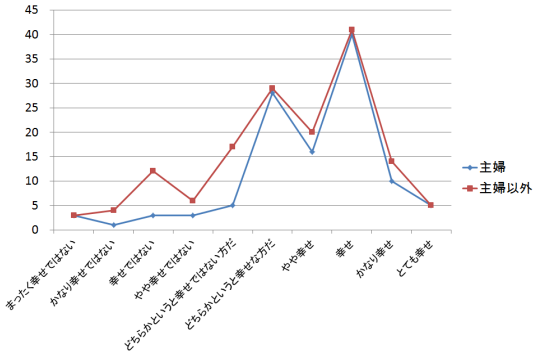

図２　主婦とそれ以外の幸福度比較

関係性に関する項目では「関係性が良好でない」と回答したサンプル数が余りに少なく、統計上の傾向を導き出すには難しいと考えられたが、各関係性についてより「良い」と答えたものから順に点数化した結果、全体として幸福度との相関性があると思われるグラフを得ることができた。

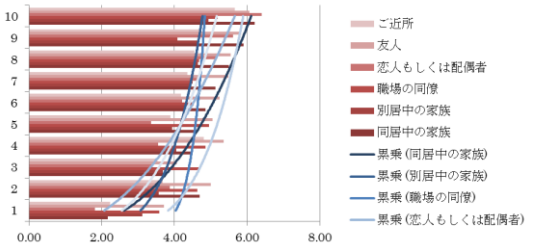

図３　点数化した幸福度毎の平均値グラフ

そこで、幸福度を「幸福である」「幸福でない」の二値に変換し、点数化した値をもとに判別分析を行った。その結果、正準相関係数は 0.393 とあまり高い値ではなかったものの、線形で分類可能であることが分かった。ただし、グループ平均差の検定において「職場の同僚」との関係性に関する項目のみ有意な差が見られなかったため、「職場の同僚」の関係性に関しては幸福度にさほど影響を与えないことが予測された。

また、内閣府発表の軸に関する項目においては幸福度との有意な相関のある項目は本結果からは発見されなかった。ただし、「収入への不満度」の項目は相関係数が 0.415 と高い値を示したものの、寄与率が 0.253 であり、あまり信頼できる係数ではないと予測される。つまり、「収入への不満度」が幸福度に影響を与える可能性がある程度であり、明確に影響があるとはいえない。

目標に関する項目においては、回答が二値であったため、ノンパラメトリック検定を行いグループ間に差があるか検証を行った。その結果、「夢・希望の有無」に関して 5%信頼区間において有意差が発見された。

「幸福」「不幸」という言葉のバイアスに関する調査では言葉の違いによって結果に差が出ないことも確認された。

以上の結果から幸福度に関連性のある項目として「夢・希望の有無」に着目すべきであることがわかった。

これらを踏まえ、ワーキンググループ内で情報を共有するとともに本調査に向けて仮説の修正を行った。その結果、以下の推測を得た。

(1) 幸福度と関係性の量的相対基準
活動時間数で観察できるのではないか

(2) 夢・希望の有無について
夢・希望の詳細項目において自己実現的な希望を抱いている被験者よりも他者への貢献を希望として抱いている方が、幸福度が高くなる傾向にあった。ゆえに項目を「やりがいの有無」「目標の有無」の二つに分けた場合、幸福度との相関の違いが観察できるのではないか

(3) 「幸福」という言葉のバイアス調査項目
「幸福」と「不幸」によるバイアスは発見されなかったが、「生活満足度」「生活充実度」という項目にした場合、違いが生じるのではないか

上記の推測を踏まえ、質問項目を作成し、第 3 フェーズとして 20 代から 60 代の男女 1,075 名（各年代毎に約 200 名ずつ）を対象に予備アンケート調査をインターネットで行った。関係性に関する量的相対関係については「家族」「同僚」「友人」「サークル」「インターネット上のコミュニティ」「ご近所づきあい」の 6 項目について、その活動時間数を自己申告制で回答してもらった。この結果に基づき、判別分析によりその影響度を解析したところ、正準判別係数において「家族との時間数」の第一関数が 0.679 と高く、次いで「インターネット上のコミュニティとの時

間数」「友人との時間数」が-0.456、0.433 であった。ただし、第一関数の正準相関が 0.325 と低いため、上記三項目はそれなりに幸福度に対して影響性がみられるが、さほど大きな影響力はないものと推測される。

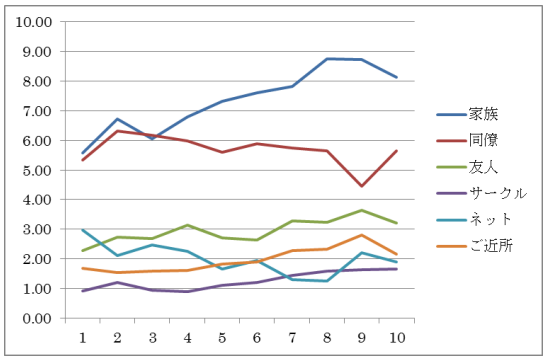

図４　点数化した関係性に関する時間数と幸福度の関係性グラフ

また、「生活満足度」「生活充実度」という言葉による幸福度とのバイアスについてはそれぞれにおいて相関分析を行った結果、前者においては 0.713、後者においては 0.773 と極めて高い相関係数が得られ、かつ 1%水準において有意であったため、言葉を生活満足度または生活充実度に変更してもさほど変化はないと推測される。

一方、「やりがいの有無」「目標の有無」においてはノンパラメトリック検定を行ったところ 1%信頼区間において有意差が発見され、夢・希望よりもさらにその差が顕著に表れた。また、両者の比較においては、やりがいについては有の平均幸福値が 7.00、無の平均幸福値 5.756 であるのに対し、目標については有の平均幸福値が 6.83、無の平均幸福値が 5.97 と、平均値比較においても「やりがいの有無」が幸福度に対し寄与する割合が高いことが推測される。さらに比率で見た場合、

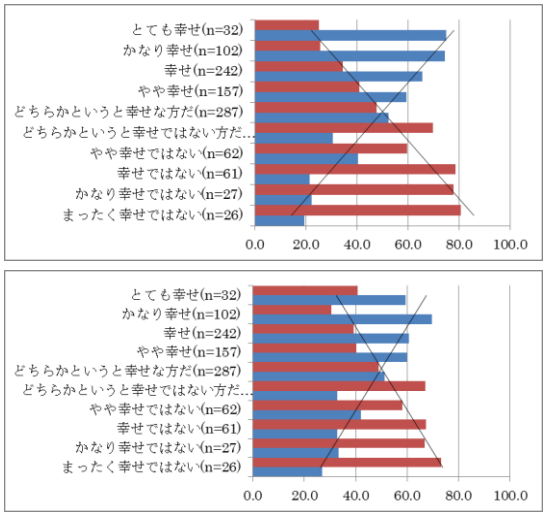

図５　上段：やりがいの有無と幸福度
　　下段：目標の有無と幸福度

「やりがいの有無の比率と幸福度」「目標の有無の比率と幸福度」のグラフを図５に示したが、これをみるとわずかながらではあるが、やりがいの有無の方が、相関性が高いことが予測される。

以上の結果から、当初仮説であったコミュニティ活動量と幸福度との相関性に関しては「家族と一緒に活動する時間数」が最も寄与しやすく、次いで「友人と一緒に活動する時間数」が寄与しやすいことが分かった。また、「インターネット上のコミュニティと一緒に活動する時間数」についてはその時間数が増えれば増えるほど幸福度は下がりやすくなるという傾向が分かった。ただ、これらについてはその影響度は全体に対してあまり大きくなく、あくまで「多少なりにその傾向にある」という程度であるといえる。

一方、「やりがいの有無」「目標の有無」「夢の有無」といった項目については幸福度との相関が高いことが推測され、特に「やりがいの有無」は中でも最も影響度があると推測されることが分かった。ただし、今回の研究においては各幸福度（10 段階）における被験者数のばらつきが大きく、統計データとしての信憑性についてはやや疑問の残るところであり、今後これらを考慮した調査が必要であると考えられる。また、やりがいの有無についてもさらにその詳細目と幸福度との関連性について研究が必要であると考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計１件）
Yusuke Ashizawa 、 Pratt Institute 、CATALYST、2013.6（予定）

６．研究組織
(1)研究代表者
蘆澤　雄亮（ASHIZAWA YUSUKE）
千葉大学・大学院工学研究科・助教
研究者番号：90634585

(2)研究分担者
小野　健太（ONO KENTA）
千葉大学・大学院工学研究科・准教授
研究者番号：70361409